

■ 解答・解説

問1 ①「ありけり」の「けり」＝過去（伝聞・伝承）の助動詞。「(昔) ～があった」と、語り伝えられてきた話として述べる用法で、説話や物語の語り出しによく使われる。

問2 本文の「宵のつれづれに」が理由。「つれづれ」＝することがなく退屈なこと・手持ちぶさたの意味で、夜、ひまでたいくつだったので、夜食・気ばらしに作ろうとした。

問3 「かいもちひ」＝ぼたもち（おはぎ）。もち米などをつぶして丸め、あんこなどをまぶした食べ物のこと。

問4 訳：「(僧たちがぼたもちを) 作り上げるのを待って、寝ないでいるのも、きっとよくないだろう」。

問5 「わろし」＝「よくない・好ましくない・みっともない」。「あし（悪し）」が「(はつきりと) 悪い・劣っている」と強くいうのに対し、「わろし」は「いまひとつだ・感心しない」という、より程度の軽い言い方である。

問6 「なむ」＝強意（完了）の助動詞「ぬ」の未然形「な」＋推量の助動詞「む」。「きっと～だろう・～してしまうだろう」と訳す。

問7 訳：「きっと（自分を）起こそうとするだろうと思って、待って（横になって）いると」。「おどろかさむずらむ」は「起こそうとするだろう」という推量。

問8 訳：「申し上げたいことがございます。お起きください（目をお覚ましくください）」。「候はむ」は丁寧、「おどろかせ給へ」は尊敬を含む、ていねいな呼びかけ。

問9 イ 意志。「(自分が) 返事をしよう」という児自身の意志を表す。

問10 文中に係助詞「ぞ」があるため、係り結びの法則により、文末（結び）が連体形「思ふ」になっている。

問11 すぐに返事をする、「(この子は早くぼたもちを食べたくて) 待っていたのだなと思われてしまうのではないかと、児が体裁（ていさい）を気にして心配している気持ち。「もぞ～」は「～したら困る・～するといけない」という心配・危惧を表す。

問12 「念ず」＝ここでは「(声を出さず) じっとがまんする・こらえる」の意味（仏教語で「いのる」の意味もあるが、ここはがまんする）。

問13 「寝入り給ひにけり」の「けり」には、僧が「(この子は) 寝入ってしまったなあ」と、その場で気づいた気持ち（＝詠嘆）がこめられている。①の「けり」が物語の語り出しの過去であるのに対し、こちらは話の中の人物が今気づいたことへの詠嘆である点がちがう（過去ととってもよいが、気づき＝詠嘆と説明できるとよい）。

問14 「わびし」＝「つらい・がっかりだ・どうしようもなくいやだ」。児が「わびし」と思ったのは、僧が「な起こし奉りそ（起こさないであげなさい）」と言い、もう自分は起こしてもらえず、ぼたもちを食べ

そこねそうだと分かったから。

問15 「えい」＝兎が言った、「はい」にあたる返事の声。もう一度呼ばれたら返事をしようと待っていた兎が、実際にはとっくに食べ始められ、呼ばれてもいないのに、ずいぶん時間が経った後でうっかり「えい（はい）」と答えてしまった。その間（ま）の抜けた、ちぐはぐなようすがおかしくて、僧たちは「笑ふこと限りなし（このうえなく笑った）」となった。

問16 宇治拾遺物語（うじしゅういものがたり）。

問17 「せむ」は、サ行変格活用動詞「す」の未然形「せ」＋意志の助動詞「む」（の連体形）。「(ぼたもちを) 作ろう」という意味。

問18 訳：「さあ、(ぜひ) 見たい。」。「ばや」は自分の願望「～したい」を表す終助詞。

問19 「ぞ・なむ・や・か」（この四つは連体形で結ぶ。「こそ」だけは已然形で結ぶ）。

問20 すぐに返事をする、ぼたもちを早く食べたくて待っていたと思われ、みっともないと感じたから。そこで、もう一度呼ばれてから返事をしようと考え、わざとがまんして寝たふりを続けた。

問21 A＝すぐ返事をする、と恥ずかしいので、がまんして寝たふりを続ける気持ち（もう一度呼ばれるのを待つ期待もふくむ）。B＝みんなが食べ始めてしまい、もう声がかからない…という失望・困惑（がっかり）。「あな、わびし」「ずちなくて」がその気持ちを表す。整理すると「期待 → がまん（やせがまん） → 失敗・落胆」という流れ。

問22 (1) 『宇治拾遺物語』は、さまざまな短い話を集めた説話集（説話文学）。仏教説話や民間の笑い話・教訓話などを多く収める。

(2) 成立は鎌倉時代（13世紀前半ごろ）とされる。
